

国際日本学研究所

I 2019年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2019年度大学評価結果総評】(参考)

国際日本学研究所においては、多様な日本研究の諸分野を、国際日本的視角から位置づけ直し豊富な実績を積み重ねている。プロジェクト、シンポジウム、セミナー等の研究・教育活動実績は申し分なく、出版物、学会発表等の研究成果も優れている。研究成果に対する社会的評価も水準を保っており、科研費等外部資金の応募・獲得状況もめざましい。

一方、海外における日本研究の衰退傾向は懸念される材料であるが、国際的な研究所や企業との連携などを通じて、本研究所がいつもの役割を果たすことが期待される。また、第三者評価の導入に関しては、その実現のための具体的な一歩を踏み出すことが望まれる。

【2019年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】

海外における日本研究の可能性をさぐるべく、アルザス・欧州日本学研究所で若手研究者からの聞き取りを行い、韓国、アフリカ諸国との研究者との共同研究会を開催するなど、国際的な研究上の連携を強めることができた。第三者評価は予算の問題と関係者の「江戸東京研究センター」での兼務による負担の問題から実現できていないが、引き続き検討する。

【2019年度大学評価委員会の評価結果への対応状況の評価】

国際日本学研究所においては、新たな日本研究の可能性を探るため、アルザス・欧州日本学研究所の若手研究者からの聞き取り調査を行った。また、韓国、アフリカ諸国の研究者と研究会を開催し、成果があった。

第三者評価については、予算のほかに、「江戸東京研究センター」の兼務の問題がある。

II 自己点検・評価

1 研究活動

【2020年5月時点における点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

1.1 研究所(センター)の理念・目的に基づき、研究・教育活動が適切に行われているか。

2019年度の活動状況について項目ごとに具体的に記入してください。

①研究・教育活動実績(プロジェクト、シンポジウム、セミナー等)

※2019年度に研究所(センター)として実施したプロジェクト、シンポジウム、セミナー等について、開催日、場所、テーマ、内容、参加者等の詳細を記入。

1. 「新しい「国際日本学」を目指して」と題して公開研究会等を開催

(1) 新しい「国際日本学」を目指して6 第2回アルザス・ワークショップ

2019年11月1日(金)・11月2日(土)。アルザス・欧州日本学研究所(フランス)。テーマ:「ヨーロッパにおける日本研究の現状と拠点形成のためにー若手研究者たちに聞く」。安孫子信、小口雅史(以上法政大学)、楠綾子(国際日本文化研究センター)、鈴木裕輔(名城大学)、黒田昭信(ストラスブール大学)他5名、欧州若手研究者6名。

(2) 「新しい日本学」を目指して7 公開研究会

2019年12月4日(水)17:00~19:00。法政大学ボアソナード・タワー25階 B会議室。テーマ:「東京大空襲を考えるーその政治的影響を中心にー」。法政大学国際日本学研究所主催、法政大学江戸東京研究センター共催。報告者:鈴木多聞(法政大学)。司会:小口雅史(法政大学)

(3) 「新しい日本学」を目指して8 公開研究会

2020年1月28日(月)17:00~19:00。法政大学ボアソナード・タワー26階 A会議室。テーマ:「心とはいかなるものか?ー古代日本人の形而上学的思想ー」。報告者:ツベタナ・クリステワ(国際基督教大学)。司会:小口雅史(法政大学)

2. 「国際日本学」関係の国際フォーラムを開催

(1) 日韓連帯文学フォーラム「文化・文学でつながる、韓国と日本」前夜祭

2019年11月29日(土)18:30~20:00。法政大学富士見ゲート6階 G602教室。法政大学国際日本学研究所主催、日本近世文学会後援。挨拶:田中優子(法政大学)。座談:[実行委員会(五十音順)]加藤敦子(都留文科大学)、小林ふみ子(法政大学)、染谷智幸(茨城キリスト教大学)、中沢けい(作家/法政大学)、韓京子(青山学院大学)。

(2) 日韓連帯文学フォーラム「文化・文学でつながる、韓国と日本」フォーラム

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

2019年11月30日(土) 10:00から17:10。法政大学富士見ゲート2階 G201 教室。法政大学国際日本学研究所主催，日本近世文学会後援。基調講演：小峯和明(立教大学・中国人民大学)。発表者：袴田光康(静岡大学)，金蘭珠(檀国大学)，鄭敬珍(東京福祉大学)，遠藤星希(法政大学)，崔泰和(群山大学)。討論：講演・発表者，司会：染谷智幸。ソヘグム(小奚琴)演奏：河明樹。対談：中沢けい×きむふな(翻訳家)。

3. 本研究所王敏研究室主催・協力の研究会等

- (1) 2019年4月19日(金)。20時～22時。日中友好会館後楽寮内。王敏研究室協力〈日中「混成文化」の現代的価値を考える〉講座
- (2) 2019年9月19日(木) 14時～16時30分。法政大学九段校舎別館3階研究所会議室6。王敏研究室主催〈日中「混成文化」の現代的価値を考える〉講座。
- (3) 2019年9月26日(木) 14時～17時。法政大学九段校舎別館3階研究所会議室6。王敏研究室主催〈日中「混成文化」の現代的価値を考える〉講座。
- (4) 2019年10月10日(木) 10時～16時。法政大学九段校舎別館3階研究所会議室6。王敏研究室主催〈日中「混成文化」の現代的価値を考える〉講座。
- (5) 2020年2月3日(月) 13時～16時。法政大学九段校舎別館3階研究所会議室6。王敏研究室主催〈日中「混成文化」の現代的価値を考える〉講座。

4. 当研究所による共催事業

- (1) ローザ・カーロリ氏講演会「江戸・東京における佃島の誕生と発展」(The origin and development of Tsukudajima in Edo-Tokyo)
2019年5月14日(火) 15時～17時。法政大学ボアソナード・タワー25階 研究所会議室5。共催：法政大学江戸東京研究センター，エコ地域デザイン研究センター，国際日本学研究所。報告者：ローザ・カーロリ(ヴェネツィア・カ・フォスカリ大学教授，法政大学江戸東京研究センター客員研究員，法政大学国際日本学研究所客員所員)。
- (2) 第7回アフリカ開発会議・パートナー事業 国際セミナー「発展途上のアフリカ諸国における社会経済的変革と日本」
2019年8月29日(木) 10時～19時。法政大学ボアソナード・タワー26階スカイホール。共催：フェリックス・ウフェ・ボアニ大学政治経済研究センター，法政大学国際日本学研究所。挨拶：熊田泰章(法政大学)，アルバン・アウレ(フェリックス・ウフェ・ボアニ大学 [コートジボワール])。総合司会：安孫子信(法政大学)。水野和夫，ジョン・カレンガ，公文溥(以上法政大学)，大湾秀雄(早稲田大学)，長谷部葉子(慶應義塾大学)，オーギュスタン・ロワダ(ワガ第二大学 [ブルキナファソ])，ギー・コル(アラッサヌ・ウアタラ大学 [コートジボワール])，ジュール・ザヌ(アボメイ・カラヴィ大学 [ベナン])，ババトゥンデ・イギユ(アボメイ・カラヴィ大学 [ベナン])，ママドゥ・ティメラ(シェイク・アンタ・ジョップ大学 [セネガル])，ママン・マラム(アブドゥ・ムムニ大学 [ニジェール])

5. 当研究所による後援事業

- (1) 日本文化人類学会主催公開シンポジウム「アイヌ民族と博物館—文化人類学からの問いかけ」
2020年1月26日(日) 13時～17時30分。法政大学富士見ゲート4階 G401 教室。主催：日本文化人類学会，共催：法政大学国際日本学研究所，日本人類学会，日本考古学協会，公益財団法人北海道アイヌ協会，後援：文部科学省。
- (2) 平成29年度科学研究費若手研究(B)採択「まど・みちおとユン・ソクチュンの童謡の比較—歌われる童謡を巡って」日韓国際童謡フォーラム「童謡を子どもの心に」
2020年1月31日(金) 13時～18時。[韓国] 国立子ども青少年図書館4階講堂。主催：[日本] 張晟喜(平成29-31年度科学研究費助成事業(若手研究(B))「まど・みちおとユン・ソクチュンの童謡の比較—歌われる童謡を巡って」[研究課題番号：17K13437]，[韓国] 方定煥研究所。後援：[日本] 法政大学国際日本学研究所/日本児童文学者協会/こすもすの会/ (有) ユージンプランニング [韓国] 国立子ども青少年図書館/韓国児童文学人協会/韓国児童文学学会(社)新芽の会。
報告者：張晟喜(法政大学)，畑中圭一(児童文学研究者)，キム・ヨンヒ(韓国児童文学学会会長)，チャン・ユジョン(檀国大学教授)，シン・ヘスン(延世大学教授)/田中修二(ピアニスト)。司会：張貞姫(方定煥研究所所長)，鄭善恵(韓国児童文学学会副会長)，パク・サンジェ(韓国児童文学人協会首席副会長)

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

1. (1) <https://hijas.hosei.ac.jp/news/20191101-02report.html>

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

1. (2) <https://hijas.hosei.ac.jp/news/20191204report.html>
1. (3) <https://hijas.hosei.ac.jp/news/20200128report.html>
2. (1) (2) 当日配付資料 (*開催案内: <https://hijas.hosei.ac.jp/news/20191129-30info.html>)
3. (1) <https://hijas.hosei.ac.jp/news/20190419report.html>
3. (2) <https://hijas.hosei.ac.jp/news/20190919report.html>
3. (3) <https://hijas.hosei.ac.jp/news/20190926report.html>
3. (4) <https://hijas.hosei.ac.jp/news/20191010report.html>
3. (5) <https://hijas.hosei.ac.jp/news/20200203report.html>
4. (1) <https://hijas.hosei.ac.jp/news/20190514report.html>
4. (2) <https://hijas.hosei.ac.jp/news/20190829report.html>
5. (1) 当日配付資料 (*開催案内: <https://hijas.hosei.ac.jp/news/20200126info.html>)
5. (2) <https://hijas.hosei.ac.jp/news/20200131report.html>

②対外的に発表した研究成果(出版物、学会発表等)

※2019年度に研究所(センター)として刊行した出版物(発刊日、タイトル、著者、内容等)や実施した学会発表等(学会名、開催日、開催場所、発表者、内容等)の詳細を記入。

1. 出版物等

(1) 本研究所の紀要にあたる研究成果報告集『国際日本学』第17号を2020年3月25日に刊行。国際日本学に関する一般的な研究成果報告3本、「小特集 日本・朝鮮近世の文学における「医者」表現」の報告論文3本、本研究所が公募している若手研究者研究論文採用論文2本、などを掲載した。そのうち小特集は2019年2月20日に法政大学国際日本学研究所公開研究会「なぜ朝鮮王朝の文学は藪医者を描かなかったのか」における高永爛氏(全北大学校)の報告と、そのときの福田安典氏(日本女子大学)、吉丸雄哉氏(三重大学)との対話をもとにそれぞれに書き下ろしていただき構成したもの。論文名は下記の通り。

- ・「名医伝と藪医譚との間」福田安典
- ・「近世における名医—『志都能石屋』『近世畸人伝』『皇国名医伝』をてがかりに—」吉丸雄哉
- ・「なぜ朝鮮王朝期の文学は藪医者を描かなかったのか」高永爛

- (2) 『証言 戦後日中関係秘史』(2020年3月、菱田雅晴・天兒慧・高原明生)
- (3) 『風土(Fudo)から江戸東京へ』(2020年3月、安孫子信 他)
- (4) 『新・江戸東京研究: 近代を相対化する都市の未来』(2019年4月、安孫子信・陣内秀信 他)
- (5) 『北斎 視覚のマジック 小布施・北斎館名品集 北斎館編』(2019年10月、小林ふみ子・浅野秀剛・瀬戸めぐり・松村真佐子・森山悦乃・安村敏信)
- (6) 『〈奇〉と〈妙〉の江戸文学史 長島弘明編』(2019年5月、小林ふみ子 他)
- (7) 『中世に架ける橋/「能とオラトリオ試論 合唱・ナレーション・宗教的機能という観点から」』(2020年3月、竹内晶子(分担執筆))

2. 論文

- (1) 「在欧美術館・博物館所蔵の日本仏教美術を訪ねて(4) —ドイツ・ハイデルベルク ポルトハイム基金民族学博物館の巻(2)、—ポルトガル・リスボンの巻」(2019年9月『法政史学』小口雅史ほか)
- (2) 「在欧美術館・博物館所蔵の日本仏教美術を訪ねて(5) —ドイツ・ブレーメン 海外博物館の巻(2)、—ドイツ・ハンブルク 美術工芸博物館の巻、—ギリシア・コルフ島 アジア美術館の巻」(2020年3月『法政史学』小口雅史ほか)
- (3) 『文政期前後の風景画入狂歌本の出版とその改題・再印—浮世絵風景版画流行の前史として』(2020年1月、小林ふみ子)
- (4) 『狂歌に文芸性はあるのか』(2019年9月、小林ふみ子)
- (5) 『近代の名所図会にみる江戸イメージ』(2020年3月、米家志乃布)
- (6) 『古作の能が教えてくれること—(鶺鴒)を手がかりに—』(2019年6月、山中玲子)

3. 学会発表等

- (1) 高田 圭: 公開講演『「68年運動」は何を生んだか、残したか?—現在・未来の視点から』 会議名「カルチャー・カフェ・デュッセルドルフ」 2020年1月17日(言語:日本語)
- (2) 高田 圭: 口頭発表(一般) “Radical Cosmopolitan Publics in the Japanese Global Sixties”

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

会議名「SNS International Conference, The Nation and the Radical Left」 2019年11月29日

(言語：英語)

(3)高田 圭：口頭発表（一般）“Combining Particularity with Universality in Japanese Studies: Historical Sociology of Japan’s Global Sixties” 会議名「EU-Japan Workshop」 2019年11月1日（言語：英語）

(4)高田 圭：公開講演「日本の『グローバルな60年代』とコスモポリタン・パブリクス」

会議名「慶応義塾大学大学院文学研究科コロキウム」2019年10月1日（言語：日本語）

(5)小林ふみ子：シンポジウム・ワークショップ パネル（指名） Descriptions forming Memories : The History of Geographic Records of Edo-Tokyo and water Tokyo and Venice as Cities on Water :Past Memories and Future Perspectives 2020年1月13日 江戸の地誌の発達を論じた。

(6)小林ふみ子：口頭発表（招待・特別） 天明狂歌研究と石川淳 日本女子大学文学部・文学研究科 学術交流企画シンポジウム「1980年代の〈石川淳〉と〈江戸〉」 2019年12月27日 石川淳の江戸文化観、とりわけ天明狂歌についての論が研究に与えた影響をまとめた。

(7)小林ふみ子：口頭発表（招待・特別） 狂文の骨法—俳文への意識と差異化 俳文学会東京例会 2019年12月21日 大田南畝が俳文を参照しながら狂文を意識化したことについて、その差異を考察した。

(8)米家志乃布：シンポジウム・ワークショップ パネル（指名） Mapping Tokyo:Cartography and the Representation of the Capital of Japan in the 20th Century International Conference Tokyo and Venice as Cities on Water. Past Memories and Future Perspectives Baratto Hall - Ca’ Foscari University of Venice 13-14 January 2020 2020年1月13日

(9)米家志乃布：シンポジウム・ワークショップ パネル（指名） 近代の名所図会・絵地図からみる江戸イメージ 法政大学江戸東京研究センター・法政大学地理学会シンポジウム「東京と江戸をつなぐ - 風景と場所」 2019年7月6日

(10)西塚俊太：シンポジウム・ワークショップ パネル（指名） 三木清の社会論の意義——西田哲学に対する独自性の探究—— 法政哲学会第39回大会シンポジウム「三木清の人生と思想-新資料を参考にして-」 2019年5月25日

(11)山中玲子：口頭発表（基調） いくさと能 “Gettysburg” シンポジウム 2019年9月14日

(12)宮本圭造：口頭発表（一般） 金春家文書の再検討 藝能史研究会 2019年5月10日

4. その他

特になし

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・出版物本体および学会配付資料
- ・本学学術研究データベース

③研究成果に対する社会的評価（書評・論文等）

※研究所（センター）がこれまでに発行した刊行物に対して2019年度に書かれた書評（刊行物名、件数等）や2019年度に引用された論文（論文タイトル、件数等）、2019年度のwebサイトアクセス件数、掲載コンテンツダウンロード件数、表彰・受賞歴等の詳細を記入。

- ・書評

小口雅史氏の編著『北方世界と秋田城』における出土文字資料を活用した新しい古代北方史料学研究についての著書についての詳細な書評論文が、『法政史学』93号（2020年3月）に掲載された（執筆者・渡辺晃宏氏）。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・出版物等本体

④研究所（センター）に対する外部からの組織評価（第三者評価等）

※2019年度に外部評価を受けている場合には概要を記入。外部評価を受けていない場合については、現状の取り組みや課題、今後の対応等を記入。

本研究所では、おもに予算問題から特別な第三者評価は導入できていない。その代替措置として内部評価の充実をはかっている。運営委員会で相互評価・批判の学術的議論が行われるように継続的作業を行っている。ここでは、各事業の研究責任者からなされる研究成果報告に対して、毎回その検証評価の議論を行っている。この方式は以前の大学評価委員会から認めていただいた経緯があり、この方式を継続している。また、本研究所は現在エコ地域デザイン研究センターと連携し、江戸東京研究センターでも調査研究活動を行っているため、本研究所の所員の研究成果は部分的に江戸東京研究センターの研究成果と重複している。その重複部分に関しては江戸東京研究センターの第三者評価を参考としている。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・国際日本学研究所事務室保管の運営委員会議事録

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

・江戸東京研究センターの自己点検・外部評価委員会資料

⑤科研費等外部資金の応募・獲得状況

※2019年度中に研究所（センター）として応募した科研費等外部資金（外部資金の名称、件数等）及び2019年度中に採択を受けた科研費等外部資金（外部資金の名称、件数、金額等）を記入。

1. 2019年度中に応募した外部資金7件（全て科研費）

(1) 研究代表者 4件

- ・小林ふみ子 基盤研究(C) 江戸狂歌資料による大衆的作者=読者の教養の研究
- ・西塚俊太 若手研究 法政大学所蔵「三木清文庫」未整理資料の調査と貴重書保存登録
- ・山中玲子 基盤研究(A) 文化の交差領域としての能楽—外部との相互影響および技芸伝承の総合的研究
- ・宮本圭造 基盤研究(B) 近世大名家道具帳の網羅的収集とデータベース化を通じた古典籍伝来の文化史的研究

(2) 研究分担者 3件

- ・竹内晶子 基盤研究(A) 文化の交差領域としての能楽—外部との相互影響および技芸伝承の総合的研究
- ・山中玲子 基盤研究(C) 音楽的分析のための能楽の謡の多層的なモデル化
- ・宮本圭造 基盤研究(A) 文化の交差領域としての能楽—外部との相互影響および技芸伝承の総合的研究

2. 2019年度中に採択を受けた外部資金21件（全て科研費）

(1) 研究代表者 10件

- ・菱田雅晴 基盤研究(A) 現代中国における腐敗パラドックスに関するシステム／制度論的アプローチ 2017-04-01～2022-03-31 1,100,000円（研究課題番号：17H01638）
- ・安孫子信 基盤研究(C) オーギュスト・コント『実証哲学講義』の歴史的意義をめぐる学際的研究 2019-04-01～2022-03-31 1,120,000円（19K00116）
- ・安孫子信 基盤研究(C) 西周の「哲学」の再検討を通じて実証哲学を新たに展望する 2016-04-01～2019-03-31 0円（2018年度完了）（16K02140）
- ・小口雅史 基盤研究(B) 古代末期防御の集落の実態解明と、中世移行期日本北方世界を含む北東アジア史の再構築 2019-04-01～2023-03-31 3,310,000円（19H01297）
- ・米家志乃布 基盤研究(C) 民間地図作製史からみたフロンティア像の日露比較研究 2017-04-01～2021-03-31 900,000円（17K03257）
- ・大塚紀弘 基盤研究(C) 資料調査に基づく日本中世における渡来人の基礎的研究 2019-04-01～2024-03-31 900,000円（19K01001）
- ・松本剣志郎 基盤研究(C) 近世都市インフラ維持管理の社会史的研究 2018-04-01～2021-03-31 500,000円（18K04545）
- ・山本真鳥 基盤研究(C) オセアニア植民地時代における非白人移住者の歴史人類学的研究 2019-04-01～2023-03-31 900,000円（19K01208）
- ・山中玲子 基盤研究(B) 能楽及び能楽研究の国際的定位置と新たな参照標準確立のための基盤研究 2016-04-01～2020-03-31 2,900,000円（16H03369）
- ・張晟喜 若手研究(B) まど・みちおとユン・ソクチュンの童謡の比較—歌われる童謡を巡って 2017-04-01～2020-03-31 1,200,000円（17K13437）

(2) 研究分担者 11件

- ・菱田雅晴 基盤研究(A) 現代中国の政治エリートに関する総合研究：選抜と競争の在り方、ガバナンス能力 2018-04-01～2022-03-31 400,000円（18H03626）
- ・安孫子信 基盤研究(B) ベルクソン『時間と自由』の総合的研究—国際協働を型とする西洋哲学研究の深化 2019-04-01～2022-03-31 220,000円（19H01190）
- ・小口雅史 基盤研究(A) 平城宮・京跡出土木簡とその歴史環境のグローバル資源化 2018-04-01～2022-03-31 150,000円（18H03597）

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

- ・小口雅史 基盤研究(B) 在欧日本仏教美術の包括的調査・デジタル化とそれに基づくジャポニズムの総合研究 2016-04-01～2020-03-31 1,000,000 円 (16H05669)
- ・小口雅史 基盤研究(B) 中世の書簡体文書による統治実践と秩序形成をめぐる日欧比較研究 2017-04-01～2021-03-31 490,000 円 (17H02377)
- ・小林ふみ子 基盤研究(C) 高大連携による古典文学の探究型授業の教材作成と教育モデル構築の実践 2019-04-01～2024-03-31 100,000 円 (19K00530)
- ・大塚紀弘 基盤研究(B) 在欧日本仏教美術の包括的調査・デジタル化とそれに基づくジャポニズムの総合研究 2016-04-01～2020-03-31 20,000 円 (16H05669)
- ・竹内晶子 基盤研究(B) 能楽及び能楽研究の国際的的定位と新たな参照標準確立のための基盤研究 2016-04-01～2020-03-31 50,000 円 (16H03369)
- ・山中玲子 基盤研究(A) 伝統芸能文楽の技をヒューマンロボットインタラクション技術へ適応させるデザイン研究 2016-04-01～2021-03-31 100,000 円 (16H01804)
- ・山中玲子 基盤研究(C) 能楽の謡の客観的な分析基盤のための新しい旋律記法 2017-04-01～2020-03-31 100,000 円 (17K02295)
- ・宮本圭造 基盤研究(B) 能楽及び能楽研究の国際的的定位と新たな参照標準確立のための基盤研究 2016-04-01～2020-03-31 100,000 円 (16H03369)

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・研究開発センター市ヶ谷事務課作成資料および科学研究費データベース KAKEN による。

(2) 長所・特色

内容	点検・評価項目
<p>・上記した多くの研究業績は、各所員の多様な業績の中から国際日本学構築に貢献するものを中心に選んでいる。ここに氏名があげられていない他の所員の研究業績ならびに、所員が兼務する江戸東京研究センターでの研究業績をも含めると、本研究所での相対的な研究レベルは特記できると考えている。</p>	

(3) 問題点

内容	点検・評価項目
<p>・近年の海外における日本研究の衰退傾向は深刻な問題であり、国際日本学の学問のありようが問われている。一研究所の努力で解決できる問題ではないが、国際日本研究コンソーシアムに加わり、他の組織と連携しながら、対策を講じたい。本研究所としてはアルザス欧州日本学研究所での研究会を通じて、ヨーロッパにおける日本研究の現状と将来の展望について若手研究者から直接聞き取りを行ったが、引き続き若手研究者との交流につとめたい。なお、2020年度は新しい専任所員を迎えることができた。この専任所員は人文科学と社会科学をつなぐ分野をこれまで主たる研究対象としており、従来なかった研究分野での研究の可能性が期待されている。</p>	

【この基準の大学評価】

国際日本学研究所の研究活動に関しては、公開研究会、国際フォーラム、本研究所王敏研究室主催・後援の研究会が開かれた。これに共催・後援事業も含めると、質・量ともに十分で、評価できる。懸案であった海外の若手研究者の発掘や、欧州の日本学研究との連携についても実施できたことは大いに評価できる。研究成果についても、出版物、論文、学会発表の点数だけを見ても、活発な研究活動が認められ、成果の公表として十分評価でき、書評等を通じた外部からの評価も得られている。

他方、予算が確保できず、依然として第三者評価等による外部からの組織評価は得られておらず、代替措置として内部評価の充実を図っている。江戸東京研究センターと研究や成果が重複していること、江戸東京研究センターの第三者評価を参考に行っていることから、それぞれの組織の位置づけを明確化する検討がなされるべきであろう。

科研費等外部資金については、研究代表者 10 件、研究分担者 11 件の科研費による外部資金を獲得しており、昨年度同様の研究活動の活発さがうかがえる。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

III 2019年度中期目標・年度目標達成状況報告書

No	評価基準	研究活動							
1	中期目標	「国際日本学」という研究分野の存在が広く認知されてきたことを受けて、試行錯誤を経ながら、その対象分野を拡大充実させていくことを目指す。その際に、国際日本学研究所と深く関わる、国内外の他の機関との連携をも模索する。							
	年度目標	これまで研究対象として扱って地域・分野と日本との関係をさらに拡大し、国際日本学的手法で日本の姿をよりゆたかに描けるようにする。とくに海外の若手研究者との連携を深める。							
	達成指標	研究対象および連携研究者の増加。							
	年度末報告	<table border="1"> <thead> <tr> <th colspan="2">執行部による点検・評価</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>自己評価</td> <td>S</td> </tr> <tr> <td>理由</td> <td>昨年度から開始した「新しい国際日本学をめざして」は、今年度も3回開催することができ、通算8回実施となった。新たな可能性を確実に展開できる見通しが立った。またアルザスでの海外在住若手シンポも昨年度以上に盛会裡に終わり、「国際日本研究」コンソーシアムからその成果を評価され、次年度以降は日文研との共催が決定した。</td> </tr> <tr> <td>改善策</td> <td>—</td> </tr> </tbody> </table>	執行部による点検・評価		自己評価	S	理由	昨年度から開始した「新しい国際日本学をめざして」は、今年度も3回開催することができ、通算8回実施となった。新たな可能性を確実に展開できる見通しが立った。またアルザスでの海外在住若手シンポも昨年度以上に盛会裡に終わり、「国際日本研究」コンソーシアムからその成果を評価され、次年度以降は日文研との共催が決定した。	改善策
執行部による点検・評価									
自己評価	S								
理由	昨年度から開始した「新しい国際日本学をめざして」は、今年度も3回開催することができ、通算8回実施となった。新たな可能性を確実に展開できる見通しが立った。またアルザスでの海外在住若手シンポも昨年度以上に盛会裡に終わり、「国際日本研究」コンソーシアムからその成果を評価され、次年度以降は日文研との共催が決定した。								
改善策	—								
No	評価基準	社会連携・社会貢献							
2	中期目標	社会貢献・社会連携を進めるために、研究会の一般への公開を進め、また成果とりまとめの後には、電子化を通じて簡便な方法で広く公開することを目指す。また本務に影響の出ない範囲で、マスコミや研究者からの所蔵史資料原本の閲覧希望に応じるようにする。社会連携・社会貢献を進めるために、電子化などを通じて研究成果を広く簡便に公開できるようにするとともに、本務に影響の出ない範囲で、刊行物・所蔵史資料の閲覧を可能にする。							
	年度目標	本研究所自設HPの構成をさらに検討しなおし、情報発信をより分かりやすい形で推進するとともに、研究成果物の電子的公開を促進する。							
	達成指標	研究会への一般市民の参加者の増加。電子的に公開された刊行物の増加。データベースの搭載数の拡大。							
	年度末報告	<table border="1"> <thead> <tr> <th colspan="2">教授会執行部による点検・評価</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>自己評価</td> <td>A</td> </tr> <tr> <td>理由</td> <td>上記の特別研究会に加えて、一般の研究会も数回開催し、また連携している江戸東京研究センターとの共催研究会も開催できた。常連と目される一般市民に加えて、新しいテーマを設定したことによる新規参加者も増加した。とくに日韓関係の政治的現状を意識した学術シンポでは一般市民にも文化交流の重要性を認識してもらうことができた。研究所刊行物については、法政大学学術機関リポジトリを通じて、紀要『国際日本学』16号（論文11本）・17号（論文9本）をPDFの形で全文テキスト付で公開することができた。</td> </tr> <tr> <td>改善策</td> <td>—</td> </tr> </tbody> </table>	教授会執行部による点検・評価		自己評価	A	理由	上記の特別研究会に加えて、一般の研究会も数回開催し、また連携している江戸東京研究センターとの共催研究会も開催できた。常連と目される一般市民に加えて、新しいテーマを設定したことによる新規参加者も増加した。とくに日韓関係の政治的現状を意識した学術シンポでは一般市民にも文化交流の重要性を認識してもらうことができた。研究所刊行物については、法政大学学術機関リポジトリを通じて、紀要『国際日本学』16号（論文11本）・17号（論文9本）をPDFの形で全文テキスト付で公開することができた。	改善策
教授会執行部による点検・評価									
自己評価	A								
理由	上記の特別研究会に加えて、一般の研究会も数回開催し、また連携している江戸東京研究センターとの共催研究会も開催できた。常連と目される一般市民に加えて、新しいテーマを設定したことによる新規参加者も増加した。とくに日韓関係の政治的現状を意識した学術シンポでは一般市民にも文化交流の重要性を認識してもらうことができた。研究所刊行物については、法政大学学術機関リポジトリを通じて、紀要『国際日本学』16号（論文11本）・17号（論文9本）をPDFの形で全文テキスト付で公開することができた。								
改善策	—								
<p>【重点目標】</p> <p>国際日本学の新しい形を模索するために、新たな対象分野の開発と海外における若手研究者の育成が必須だと考える。そのためにこれまで国際日本学研究所が対象としてこなかった地域や時代、あるいは対象物を専門的に扱っている人材を国内で確保するとともに、アルザス欧州日本学研究所を拠点に、海外での人材をさらに発掘し、新たに協力関係を深めていくことを考えている。</p> <p>またすでに兼担所員となっている研究者についても、これまでと違った切り口で国際日本学研究所に取り組んでいくことが可能であるか引き続き検討してもらうことにする。</p>									
<p>【年度目標達成状況総括】</p> <p>年度末報告にも記したように、今年度も新規研究会を繰り返し開催したことによって、研究対象を大幅に拡充することができた。また国内外において人材の発掘にも成功した。例えばアルザスの欧州国際日本学研究所での若手シンポジウムでは、欧州内各地からこれまで研究所とは接点を持っていなかった人材をさらに追加して見出すことができ、国内でも、法政大学内外で同様に新しい人材を発掘することができ、研究所の客員所員、兼担所員としてお迎えすることができた。</p> <p>研究分野においても、これまで扱ってこなかった現代史や中古文学の成果にも踏み込み、新しい研究視点を獲得することができ、外国人による日本古代文化の新視角の可能性も切り開かれた。</p>									

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

さらには長期にわたって継続している在欧日本仏教美術データベースの調査過程においても新しい素材の発掘が続けられている。引き続き、こうした分野での国際交流拡大に取り組んでいきたい。

【2019年度目標の達成状況に関する大学評価】

国際日本学研究所の2019年度の年度目標は、若手研究者との連携という点では十分に達成されている。海外での人材発掘と若手の育成は、日本研究にとっては不可欠である。ただし、国際日本学であるためには、個々の研究者の成果を上げるだけでは必ずしも十分とは言えず、背景の異なる複数の研究者による国際共同プロジェクトを行う必要がある。史学一つをとっても、日中韓の研究成果には大きな隔たりが存在する。新たな国際日本学の構築に向けて、さらなる検討が望まれる。

IV 2020年度中期目標・年度目標

No	評価基準	研究活動
1	中期目標	「国際日本学」という研究分野の存在が広く認知されてきたことを受けて、試行錯誤を経ながら、その対象分野を拡大充実させていくことを目指す。その際に、国際日本学研究と深く関わる、国内外の他の機関との連携をも模索する。
	年度目標	これまで研究対象として扱ってこなかった地域と日本との関係の調査研究をすすめるとともに、社会科学的な視点も加味した新たな研究分野を開拓することを目標とする。
	達成指標	研究対象および連携研究者の増加
No	評価基準	社会連携・社会貢献
2	中期目標	社会貢献・社会連携を進めるために、研究会の一般への公開を進め、また成果とりまとめの後には、電子化を通じて簡便な方法で広く公開することを目指す。また本務に影響の出ない範囲で、マスコミや研究者からの所蔵史資料原本の閲覧希望に応じるようにする。 社会連携・社会貢献を進めるために、電子化などを通じて研究成果を広く簡便に公開できるようにするとともに、本務に影響の出ない範囲で、刊行物・所蔵史資料の閲覧を可能にする。
	年度目標	本研究所自設HPを充実をはかるとともに、オープン予定のHOSEIミュージアムに協力し、よりわかりやすい形で情報発信を行う。
	達成指標	研究会への一般市民の参加者の増加。電子的に公開された刊行物の増加。データベースの搭載数の拡大。

【重点目標】

これまで研究対象として扱ってこなかった地域と日本との関係の調査研究ならびに社会科学的な視点も加味した新たな研究分野を開拓することを目標とする。

【目標を達成するための施策等】

新たな人材を研究所に迎え、研究活動を促進する。アルザス欧州日本学研究所を拠点に海外での人材をさらに発掘し、国内の研究機関とも組んで協力関係を深める。

【2020年度中期目標・年度目標に関する大学評価】

2020年度の目標については、これまで扱ってこなかった地域を研究対象にすることに加え、新たな研究分野の創出も掲げている。昨年度と同様に、引き続き海外での人材発掘にも力を入れるとある。しかし、アルザス・欧州日本学研究所と国内の研究機関の協力関係については2020年度目標に具体的な記述はないため、年度末報告にて記載が望まれる。また、個々の研究促進を図るだけでなく、新たな国際日本学のため、国際的な共同研究も検討することを期待したい。

【大学評価総評】

国際日本学研究所においては、活発な研究活動が行われている。公開研究会、国際フォーラム、研究会を複数回開催し、出版物、学会発表等の研究成果についても、量・質ともに十分評価できる。研究成果に対する社会的評価もあり、科研費等外部資金の応募・獲得状況もめざましい。但し、江戸東京研究センターと研究や成果が重複していることから、それぞれの組織の位置づけの検討が望まれる。

海外の人材発掘を積極的に行い、国際日本学研究を支援する努力も評価できる。今後は、研究者の人材発掘と並行して、国際的な共同研究実施に向けた検討や、年度目標・達成指標の明確化にも期待したい。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。